

第37次第3回  
宮城県社会教育委員の会議兼  
第12次第8回  
宮城県生涯学習審議会  
会議記録

令和4年11月28日(月)

宮城県教育委員会

第37次(第3回)宮城県社会教育委員の会議 兼  
第12次(第8回)宮城生涯学習審議会 会議記録

○ 日 時 令和4年11月28日(月)午前10時00分から正午まで

○ 場 所 宮城県行政庁舎 4階庁議室

○ 出席委員(10名)

石井 義之 委員	伊勢みゆき 委員	門脇 果世 委員	黒沼 俊郎 委員
金 祐子 委員	坂口 清敏 委員	菅原 真枝 委員	中保 良子 委員
野澤 令照 委員	増田恵美子 委員		

○ 欠席委員(5名)

遠藤 智栄 委員	加藤 拓馬 委員	須田 一憲 委員	高橋 守夫 委員
松田 道雄 委員			

○ 事務局

武田 健久 参事兼生涯学習課長	千田 知幸 社会教育専門監
鎌田 光伸 生涯学習企画振興班長	加藤 純一 同副班長
石川 寛之 社会教育推進班長	
平林 健 協働教育班長	

次 第

- 1 開会
- 2 議長あいさつ
- 3 議事
  - (1) 報告・協議
    - ・子ども若者に関わる事業の取組(成果と課題)について
    - ・第37次宮城県社会教育委員の会議兼第12次宮城県生涯学習審議会のテーマ設定に向けて
    - ・その他
- 4 諸連絡
- 5 閉会

(司会:加藤)

それでは、只今より第37次第3回宮城県社会教育委員の会議兼第12次第8回宮城県生涯学習審議会を開会いたします。なお、情報公開条例第19条によりまして、県の付属機関の会議は原則公開となっておりますので、本会議も公開により審議を始めさせていただきます。

本日は5名の委員が欠席となっております。15名中10名の皆様の出席がございますので、生涯学習審議会条例第6条第2項の開催要件の委員の半数以上の出席は満たしており、本審議会は成立することをあらかじめ御報告いたします。

では、野澤議長に御挨拶いただきます。よろしくお願いいたします。

(野澤議長)

皆さんおはようございます。

それでは、今日は10名の委員の方々の御出席と伺っておりますが、いよいよ今回の会議のテーマを決める前段ということで、皆様から様々な御意見を頂戴して、それを反映できるようにと考えております。最後まで協力をよろしくお願いいたしますと思います。

(司会:加藤)

ありがとうございました。それでは、生涯学習審議会条例第6条第1項の規定のとおり、この後の議事進行につきましては、議長にお願いいたします。

(野澤議長)

はい、ありがとうございます。

それでは議事に入ります前に、本会議における傍聴希望者の状況につきまして、事務局から報告をお願いいたします。

(事務局)

本日、傍聴希望していらっしゃる方がいますので、会議場への入室を許可してもよろしいでしょうか。

(野澤議長)

はい、許可いたします。

なお情報公開に関する取扱いにつきましても、あらかじめ確認をさせていただきますが、今回も審議会等の会議の公開に関する事務取扱要綱第8条によりまして、本日の会議資料及び発言者名を明記した会議録を県政情報センターにおいて3年間、県民の皆様が閲覧できますように提出することになっておりますので、よろしく願いいたします。

では、議事・報告・協議に入ります。限られた時間ではございますが、有意義な会議になりますように、委員の皆様のご協力をよろしく願いいたします。

それでは、これまでの議論の報告と本日議事の内容につきまして、事務局より説明をお願いします。

(事務局:加藤)

はい、それでは皆様のお手元の資料1を御覧ください。まずは、これまでの審議の主な内容について確認しておきたいと思っております。

まず、テーマの方向性についてですが、前回までは「子ども・若者」という大きなくくりの中でテーマを考えていこうということで提案させていただきました。ただ、前回の会議におきまして、以下の意見が出されました。まずは、「子ども・若者という対象が広すぎる」という御意見。「子ども・若者の実態や課題がまだまだ曖昧である」ということ。「具体的に誰のことを指しているのかよく分からない」という御意見をいただきました。

「子ども・若者」を取り巻く状況と課題として、これまでに挙がっている御意見としては、

- ・地域の中に子供たちの居場所がないのではないか。
- ・身近に相談できる大人がいない。
- ・小中学校での地域との関わりが高校・大学就職と進むに従って、地域との関わりが少なくなっている現状があるのではないか。

という意見が前回まで挙げられた課題でございます。

テーマに関して、具体的な話まで進んでいなかったのですが、前回挙げられているところでは、「子ども・若者が大人と共に主役になれる地域を目指して」という御意見をいただいております。また、「住んで楽しい！学んで楽しい！関わって楽しい！私たちの地域」に関連して、その具体的な姿を押さえることも必要ではないか、ということが挙げられました。

テーマに使いたい言葉としては、『「地域と生き、地域を生かす」』『協働力』という言葉も入れてはいいのではないか」と。

気を付けたい表現としては、『「未来を担う子ども・若者」』とか『「地域を担う・・・」』などの枕詞的なもの

のは、子ども・若者に対して圧力をかけるような感じを受けるので、そういう枕詞的なものはあまり使わない方がいいのではないか」という御意見をいただきました。

具体的な提言の内容としても三点、既にいただいているとおりです。

- ・コーディネーター的人材の育成が必要。
- ・子ども・若者と地域をつなぐ取組の例を紹介していくこと。
- ・現場で活動する人の参考になるような「活動プログラム」を作成したらどうか。

という意見をいただいております。

要望としては、4点ありました。内容については、資料を御覧ください。

では、本日の会議の内容ですが、大きく3点と考えております。

一つ目は「テーマの方向性」についてです。これは、すでに委員の皆様にはメールで、御意見をうかがっているところでしたが「子ども・若者」の捉えについても一度確認したいと思いません。

二つ目に「若者の実態と課題の共有」です。

最後に、この提言で目指す「若者」の姿を皆さんで共有し、それを具体的なテーマ決定に活かしていければと思います。

以上です。どうぞよろしくお願いいたします。

(野澤議長)

ありがとうございました。今、事務局から御説明がありましたが、そのような流れで今日の話し合いを進めて参りたいと思います。

まず、テーマの方向性ということで、事務局からお話がありました。この資料を御覧になりながら、皆さんと確認をしていきたいと思えます。先ほども説明がありましたように、若者をメインとしたテーマ設定にしてはどうかという御意見。これが皆さんからの共有したものと捉えておりますけれども、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。うなずいていらっしゃる方々がほとんどですので、「若者」を中心にした方向性で進めて参りたいと思えます。加えて、ここで御意見がある委員の方がございましたら、補足をお願いできればと思えますが、よろしいですか。

それでは「若者」ということをテーマにするということですので、まずはその実態、さらには課題を委員の皆様方と共有をして参りたいと思っております。最初に生涯学習課の各班から様々な事業を通して見えている課題でありますとか、今の若者の姿ですね、それについて報告をお願いしたいと思えます。では各班からお願いいたします。

(生涯学習企画振興班:加藤)

それでは、まず私、副班長加藤が説明いたします。資料の2を御覧ください。この資料は、第36次の提言の3つのキーワード「学びづくり」「人びとづくり」「絆づくり」をもとに現在行っている生涯学習課の事業を整理したものです。

まず、生涯学習企画振興班ですが、実際、直接的に若者に関わっている事業は多くありません。資料に記載してある「みやぎの文化育成支援事業」と「文化芸術による子供育成推進事業」というものがあります。これは、主に幼稚園・小学校・中学校などに、芸術家や音楽家を派遣して様々な演劇や音楽を提供するお手伝いをしているものとなります。さらには、高等学校の文化活動への支援ということで、高等学校の文化連盟の事務局と連携しながら、様々な展示会の準備であったり、後援申請の依頼の窓口を手伝ったりということが主なものでございます。

また、ここには書いておりませんが、今年度の県民大学の中で若者と関わる部分が結構出てきたと思っております。今年度開催した大崎市での県民大学には、小学生が参加して大人と一緒に講座を受けることで、大人も子供もすごくいい刺激を受けたという学びの場面を見ることができました。

今後も県民大学の中味を工夫しながら若者に関わっていく、巻き込んでいくということが必要なことかなと思ったところでございました。以上企画振興班でした。

(社会教育推進班:石川)

続きまして、社会教育推進班の事業について御説明をいたします。一つ一つの事業の主な目的と、それからどのような内容で行っているかというところを中心にお話をさせていただきたいと思っております。

「少年団体指導者研修事業」、これはジュニア・リーダーの育成になります。昭和47年からずっと続いている長い事業となっております。県では、中級、上級研修会を行ってまして、目的としては地域活動、主にこれは子ども会活動の支援も含んでいますが、中高生を育成するという事業となっております。安全教育等の必修研修や自然体験活動やジュニア・リーダー同士の交流活動などをとおして、子ども会や地域との関わり方について学びを深める研修会を行っております。

続いて、「青少年と地域をつなぐ体験推進事業」これは令和3年度からの新規事業になっておりましたが、令和3年度はコロナで中止せざるを得ない状況で、今年度初めて行っております。こちらは、防災活動を含む地域活動を子供たちが学びをとおして、どのように地域と関わって行ったら良いかということを探求するような中身の研修会になっております。今年度は地域活動を主体に

関わり方を学ぶ「MY プロジェクト」。それから、防災活動の視点で地域とどう関わるかということを知る「BEキャンプ」という2つの事業に分けて実施しております。そこで学んだことをとおして、その後地域と実際関わってみるといったところが活動に入っておりますので、1月の21日にオンラインにより、どのような取組をしたのかということをお互いに発表交流する場を予定しております。来年度は、「MYプロジェクト」と「BEキャンプ」一つにして3泊4日程度のサマーキャンプとして行えないか検討をしているところです。

続いて、「青少年国際交流推進事業サマースクール宮城・女川」です。これは、松島自然の家や女川町を会場に、県内外の高校生が国内大学生との対話や社会人との講話等を通じて、これからの生き方を考えたり、国際理解について考えるという内容でございます。地域の未来ということと、国際交流ということとは合わないかなと思われる方もいらっしゃると思いますが、女川町で被災されて、それから復旧されている方の講話などを通して、それを海外に伝えるという意味も入っておりますので、地域に関わるというところでこの事業を上げさせていただいております。こちらは文部科学省の委託事業として平成29年度から行っておりましたが、今年度で事業終期ということになっております。来年度は、先ほど申し上げた「青少年と地域をつなぐ体験活動推進事業」の中に、地域の方との交流などを組み込んだ形にできないかなと考えているところでございます。

続いて、「体験活動等を通じた青少年自立支援事業ウインターチャレンジ MIYAGI」というものです。こちらは文部科学省の委託事業として、今年度初めてを行うものになっております。不登校等、学校に行きづらいという子供たちを対象にしまして、県立自然の家での体験活動等を通じて、大学生ボランティアや職員などと多くの人と交流するということで、社会性の向上を図るものです。内容としましては、漁業体験とか雪遊びとか県立自然の家のフィールドを生かした活動をする予定にしております。これは12月の24日から28日まで4泊5日で行う予定にしております。

次に「青少年活動促進事業」ですが、こちらは地域の青年が交流し合う機会をつくり、地域における活動を促進させる目的で行う地方青年文化祭であるとか、県青年文化祭・県青年体育大会が入っております。令和3年度まではコロナで中止もあったのですが、今年度は今のところ全て行っているという形です。

最後、「青年会館研修奨励事業」ですが、これは県の青年会館が主催する青少年対象の事業に補助金を交付する事業となっております。

青少年対象の事業は中高生を対象にしたものが多かったのですが、やはりその高校生が卒業した後、どのように地域と関わっていくかということが大事だと思っております。以上です。

(協働教育班:平林)

続きまして、協働教育班から説明いたします。協働教育班では「中高生の復興の担い手づくり事業」というものに取り組んでおります。これは、国の復興庁被災者支援総合交付金というものを活用しております。こちらは国の10分の10の補助事業であり、令和2年度までは県内各市町村とNPOも含めて活用いただいたものですが、終期を迎えまして令和3年度からは復興支援、もしくは震災伝承等に限って利用していいという縛りが入ってきました。

そこで宮城県でも令和3年度から、沿岸及び内陸5市町村のみを対象として取り組んでおるのでございます。主な目的としては、地域資源とか人的資源を活用した震災伝承の取り組みを継続していくための体制を3年間で構築するという3年だけの事業になっております。「中高生の復興の担い手づくり事業」ということで実施しております。主に何をしているかといいますと、県内各学校中学校も含めて放課後子供教室、それから地域未来塾というものに取り組んでいるところが多数あります。放課後の子供の居場所づくり事業にはなるのですが、そこには、御退職された皆さんなどが子供たちの勉強の見たり、または関わったり、子供たちの居場所づくりとプラス地域の方々の生きがいづくりのような取組でございます。そこに、この復興の担い手づくり事業というものの特化した事業として、震災の教訓を後世に語り継ぐ活動に中高生の若い力を投入して子供たちと関わらせていくという事業になっております。各市町村から3年度分の報告が上がってきたものについては、震災絡みということで3月の時期に主に大きな取組をする予定でいたのですが、ちょうど地震が起こったり、またコロナウイルスが流行したりで、ほとんどの市町村では思ったように取組が出来なかったというところがございます。震災遺構伝承館とかを使って、高校生と小中学生が共に学ぶ時間を設けたり、ジュニアリーダーを活用して関わらせたりという計画はあったようですが、3年度はほとんど出来ていなかったという報告を受けました。

今年度に至っては、取組を具体化させているところなのですが、詳細はまだ掌握していない状態でございます。3月にかけてまた震災絡みの取組を予定しているようです。今後、市町村の現地視察を行いながら、令和5年度に向けて何が出来るのかというところを考えております。

なお、語り部育成については、復興支援伝承課でも、取り組んでいるということがありまして、東北大学との共同研究で現在の語り部とのお話合いとかいうものをやっているそうです。復興支援伝承課でも具体的な語り部育成という部分については、直接県で実施しているものはまだはっきりしたものはないということでございましたので、こちらの取組も含めて伝承課と情報を共有しながら効率のいい、また実効性のある取組をしていかなければいけないかなと考えているところです。以上です。



(野澤議長)

ありがとうございました。今、生涯学習課各班から、事業の御説明をいただきました。これまでのお話について、委員の皆様から質問や確認などがございましたら、お願いをしたいと思います。

(伊勢委員)

各班からの、事業説明ありがとうございました。私は、全部の班に何らかの形で関わらせて活動をさせていただいております。

今、平林班長からありました、協働教育班の語り部の件について確認をさせてください。県の伝承館で語り部をやっている若者を私が始めました石巻の居場所にコアスタッフで関わってもらっています。石巻の伝承館で働いていらっしゃる方の知り合いがおりその方の話でも、やはり課題として若者たちの語り部はいないという御相談をいただいております。語り部を育成したいけれども募集をしても結局来ないという課題があります。そこで育成の部分は、私が作った石巻に作ったシュロハウスと共同で一緒に出来ないかということ伝えていました。ただ予算が全くない状態ですので、これはどこからか予算がつくのでしょうか。また、今の20代の若者たちが東日本大震災と正面から向き合っていないという大きな課題があります。その課題をクリアしない限り、やはり語り部というところまで行かないですね。大人が考えている以上に、当時小中学生とかっていう子たちの心の傷がすごく深いというのを、この半年社会教育に関わって、私も現場を持ってものすごく痛感しています。思いがあるけどそこに至らないというところの背景をもう少し丁寧に私たちの方が認識をして、やはりやる気がある子がすぐ出来るかという状態ではないというところを少し理解いただいた上で、何か一緒にやれたらいいのかなとは思っております。2点です、すみません予算の問題と、その育成に関して分かっていたら教えてください。

(協働教育班:平林)

予算については、復興支援伝承課です。東北大学との共同研究というものについての予算が付いているという話は聞きました。

語り部育成という部分の具体策というところについては、補助金を出している5市町村の生涯学習担当の方に、今のところも一任するという状況ですので、まだ具体的にどのような手法で具体的なプランがあるのかというところまでは確認していない状況でございます。

(伊勢委員)

ありがとうございます。

(野澤議長)

ありがとうございます。他に何か。

(増田委員)

文言の問題ですけれども、資料2にある「地域の未来を担う若者人材を育成する」という表現がありますが、先程そういう枕詞は使わないということの御確認があったと思いますので、「担う」よりは「未来に関わる」とする方がいいのかなと思ったところでした。

(野澤議長)

ありがとうございました。枕詞ということですね。先程事務局からも御指摘がありました。そのところは留意していきたいと思います。はい、他に何か。よろしいでしょうか。

それでは、次に各委員の皆様が実際に関わっていらっしゃる様々な取組や普段目にしている若者の様子、そういったことから感じられていることなどをお一人お一人伺って参りたいと思います。どなたかよろしいですか。

(坂口委員)

ここに来ている時の肩書きでは上杉チャネルですので、小中学生を対象にすることの方が多。職業柄は大学生を対象にすることが多いのですが、中学生に関しては結構受け皿があって育成に関してもジュニア・リーダー制度とかもある。やはりないのはそれ以上の大学生以上30歳ぐらいまでですね。シニア・リーダーと言うか分かりませんが、そのような制度がないというのが問題なのかなと思います。

そして、学生たちと関わっていて感じるのは、彼らはかなりドライですね。やりたいことはあるのかもしれませんが作ってはやるのですが、「じゃあ、こんなものがあるよ」とただ言うだけでは絶対やってくれません。何か自分に直接関わってくる、跳ね返ってくるようなインセンティブがないと、彼らはたぶん動かないと思います。それがあっても中々動かないですが、一つ最近動かしているところというと、消防団とかは大学生が入れるようになりました。あれにはインセンティブを与えているんですね。就職に少しプラスになるということで、そういうことを考えると、それで少しずつ入って

来ていて、各団様子を見ると2～3名いるようです。仙台市の消防団ですけれども、この2年3年継続しているような傾向にはあります。これを続けていけばいいのかなと思うのですが、ただ、それだけではだめだということでしょうね。インセンティブがあって、「ここに参加するといいよね」ということ。つまり大学生以上を取り込むためには、大学と地域にある企業が連携して行かないと、いわゆるシニアリーダー育成というところにはたどり着かないのではないかなと思います。

消防団がそうやって出来ているのは、企業側も推しているからだと思うんですよね。やはりそういう仕組みづくりを作っていないと、やっぱり年齢が上の若者の育成にはつながっていかないのかなというのが、私の最近の感想です。

(野澤議長)

ありがとうございます。貴重な御意見いただきました。他の委員のみなさま。

(増田委員)

私は富谷ユネスコ協会という協会の会長をしているのですが、この秋にジュニア部というのを立ち上げました。これは全国で初じゃないかと言われていて、小中学生を対象にしたものです。実は先週23日にイベントを行って、そのイベントには保護者の方たち、検討中の方たちも来ていただきました。まず、ミツバチの養蜂を富谷市はやっているんで、ミツバチの一生の話をして、その後日本ミツバチと西洋ミツバチの蜂蜜の味比べをしてもらった後に、「実はこのスプーン1杯の蜂蜜は1匹のミツバチが一生かけて集める量なんだよ」と言った時に、子供たちはすごくびっくりして、保護者の方も、「えっ！すごいショック。いっぱい食べちゃった」と気づいていただきました。

また名札も、エコを心掛けて間伐材に麻紐を付けた名札にしたのですが、それもただの四角ではなくて、側面を工夫して6人集まれば六角形になるように、六角形というのはハニカム構造と言って、ハチの巣の形と同じで永遠に無限につながっていく、最後に「実はこの名札に仕掛けがあるんだよ」と言って6人が集まって六角形を作らせる。そういう私たちの思いを全て2時間に込めました。そうしたら子供たちの感想には「みんなが笑顔でいられる仲の良いにこやかな部にしたい」とか、「中学生なのでしっかり小学生部員を支えられる人になります」とか「世界一の部にしたい」とか、「住みやすく平和の富谷市にしたい」などすごくいい感想が寄せられて、検討中の人も全員入会してくれました。その時に思ったのは、本当に大人の想い、どういう社会にしたい、どういう未来にしてどういう子に育てほしいっていう思いを持った人たちが本当に場を作っていくことがすごく大事と感じました。子供たち若者のことを考えた時には、大人がどうあらなければいいのか、結

局、自分たちに降りかかってくるので、本当にとてもここを真剣に考えたいと個人的に思っております。

(野澤議長)

ありがとうございます。他の委員の皆さんもいかがですか。

(伊勢委員)

今回の提言で、若者に焦点を当てていただけるということは、私は非常に大きいなと感じています。やはり、私も小学生から大学生、地域の方々と学校教育、そして社会教育で関わらせていただいております。その中である若者が言った言葉を紹介したいと思います。私は5月から石巻の中心部に一軒家を借りまして、民間から東日本大震災関係の基金をいただいて高校生・若者が主役になるみんなのシュロハウスをオープンしました。当初は週2回、水金の高校生の放課後サードプレイス第3の居場所として開けています。2ヶ月経った現在、10代後半から20代前半、震災の時小学校の4年生5年生とかちょうど中高生だった子たちがコアの利用者になっています。こういう状況を見ると、機能としてはセカンドホーム第2の家というのが本当に必要だったということを感じています。やってることは自習が出来るような場所とか、普通にみんなで話すような場所とかがあります。他には、いつもみんなでご飯を作ってみんなで食べて片付けて、その後お腹が満たされたら本音を語る。若者たちは、働いている子もいるし、これから就職という子もいた時に、自分の生活をどうするか、その背景には、自分だけではなく家族がすごく関わっていて、家庭が機能崩壊をしていたり、震災の影響でメンタルの問題があったりというのを抱えています。そんな彼らが、一般的な公共の支援機関や民間の支援機関に行っていないかというそうではなくて、中高生の時にも何かしら関わっている。関わっていて諦めてるんですよ。結局大人側の支援というのは、大人側の理屈で何時から何時までとか、どこからどこまでこういう条件の人が通って来てねというところで成り立っています。「通おうと思っても、条件付きなんだ」と言われたんですね。しかも、「高校を卒業したら、自分で解決しなければいけない」と言われたんです。シュロハウスで若者に話されたことが、あっさり言っているのですがあまりにも過酷で。お腹が満たされた後に若者同士で話をしているのですが、あまりにも一人一人のケースが重たくてですね。そういう話し合いをする場所さえもなかったんだな、そういう繋がりもなかったんだなということを痛感しました。本当に彼らがギリギリのところでは生きています。でも、私達大人の前では笑顔で過ごします。この実態を私は無視が出来なくて、本当にどうしたらいいのかというのを沢山のひとと一緒に考えていきたいし、どこに

予算を投入すればいいのか、どういう人をつなげばいいのか、本気で考えていきたいと思っています。

一つ分かっていることは、高校生以上になると誰に話をするかというのを彼らが決めるんですよ。こっちが「いいよ。いいよ。」と言っても行かないのです。そこには、「小中高の間に信頼できる大人との関係づくりがどれだけできるか」というのがすごく関わっている気がします。ですから、私たちに求められているのは、その傾聴と受容、そして的確なアドバイスとか、受け止めるだけでいいと思います。本当に困った時に目の前のサポートというか支援は、もしかしたら専門的過ぎない方がいいのかなと思う時もあります。

「冷蔵庫が空っぽで明日食べるご飯がない」と言われた時に、食事の支援だったり、そしてその先の彼らの人生を支えるようなサポートだったり、そういう場が本当に必要だということを感じています。教育分野だけでなく福祉との連携ももちろん必要なのですが、専門的過ぎずに私達地域の大人一人一人が出来ることをやっていくということも大事だと思います。

また、本当にやる気のある子達に対して、思っていることが2つあります。1つは、高校生・若者を対象にした話し合いをうまくしたい、対話の場をうまく作りたいというファシリテーションの話し合いの講座を開催してはどうかということ。そして、高校生・若者の想いを形にする、自分たちでやってみるという場ですね。大人が講座を作って終わりではなくて、彼らにお金を付けるファンド的なものがあるといいと思います。さらに、そこに伴走をする役割の大人とか若者とかがいて、そういう経験値体験を積めるような学びの場とかが必要かなと思っています。2つ目は、学校でも行われているのですが、就職に向けての自己理解の場が本当に必要だなというのが感じています。

(野澤議長)

貴重な御意見をいただきました。今、伊勢委員のお話を伺いながら35次でしたでしょうか。提言の中には、やはり震災というものを抱えた、あるいは経験した宮城だからこそ言えることが必要ではないかという議論があったことを思い出しました。まさに今、伊勢委員のお話に繋がることではないかなと感じるところです。是非、そこを意識しながら、また話し合いを進めていけたらと思っています。はい、他に委員の方々。

(坂口委員)

インセンティブという言葉は私は使わせていただきましたが、「こんなスキームで」というだけでは不十分だということと、もちろん、金銭も必要ではあるのですけれども、やはり一番大切なのは、彼

らの琴線に触れるようなそういうインセンティブだと思いますね。自分に直接というのはそういう意味です。それは各人違うわけですが、それに触れた時に彼らは動きます。そこを我々が見極める何か、そういう場を提供出来るかということに関わってくるのではないかなと、今、伊勢委員さんの話を聞いていて思いました。

(野澤議長)

ありがとうございます。今日は校長先生もいらっしゃいますけれども、学校教育の場でもかなり大きく変化して来ています。義務教育の中でも、やはり子供たちが実際に地域作りに関わるような学びを既に始めているような時代でございます。そんなことにもつながって、若者たちをどう捉えていくかという時には、今、伊勢委員や坂口委員からお話があったことにもつながっていく話ではないかと思っています。それではそれぞれの委員の皆様からお話を聞いていきたいと思いますが、よろしいですか。

(金委員)

小学校の校長ですが、私がいる地域は牡鹿半島ですので、学校では、素敵な大人に出会わせたというか、大人がどんなことを考えて、今の仕事をしているか、そういうところを学ばせたいというところで、体験学習を重視しています。漁師さんだったり、養殖業をされている保護者さんだったり、仕事をする姿を小学生には見せています。そこから大人がどんな願いを持って仕事をしているかというところを学んでほしい。ただの体験に終わらず、体験をさせてもらえることによって、その大人の姿を子供たちに学んでほしいという思いで、体験学習を取り入れているところです。

子供たちには大人になっていく時に幸せになってほしい。だから、今の大人の姿を頑張っている姿をよく見てもらえるような活動を作っています。子供たちですと、学校に来ているので、そういう体験活動だったり、大人の姿、教師が思うところを感じてくれます。中学校も人が集まっているところなので、活動を通して学ぶことがすぐ出来るのですが、やはり高校となると地元を離れてしまうということもあり、どうしても高校・大学の間は地域との関わりは、少し遠くなるのかなという感じがあります。また地域に戻って来るとなると、そこはやはり企業だったり、やはり身を立てていかなければならないという年齢になってくるので、働くところが必要になってくると思います。働く場は年齢が上がってくるに従って、切実な問題になってくるのだと日々感じているところです。

話は変わりますが、牡鹿半島の皆さんは1度外に出て、戻って来て養殖業をされている方もおります。それはお父さんたちは新しい漁業の仕方、新しい養殖業の仕方を他と繋がりながら学ん

できて、今新しいことをされて行くというところがあるようです。もっと町全体を活発に活性化するためには、その地域の各企業とのつながりがもっと密になっていくといいのではないかと思います。

(野澤議長)

はい、ありがとうございます。今、金委員からお聞きしましたが、真剣に生きている大人の姿というのは、子供たちに自然と沁み込んで行くのだろうなということは、様々なところで感じる場所がございます。ありがとうございます。

他の委員からもお話を伺いたいと思いますが、石井委員よろしいですか。

(石井委員)

皆さんの意見を聞いていますと、まさにその通りだと感じたところです。若者の現状というようなことですが、小学校それから中学校においては、子ども会活動などを通じて地域と関わる機会があると思っております。それが高校生、大学生、それから社会人となると、10代から20代においては地域との関わりがどんどん減ってくるというのも、現状にはあると感じています。

それぞれの地域によって、若者の数、人数が多かったり少なかったりというのがあるとは思いますが、同世代の若者がいないから地域活動への参加を躊躇している若者も中にはいるのではないのかと思っています。年代も30代になると家庭を持ったり、子供を持ったりして子供を通じて地域の活動、それと地域の関わりが多くなってくると思います。

それから、昔は地域全体で、家の外でも子育て、見守りなどをやっていたように思いますが、今はそういったことも少なくなり、近所との付き合いも薄くなってきていると私の住んでいる地域の中でも感じているところです。

では、どうやったら若者が地域の行事や講座等に参加するようになるかと考えた時に、若者の持っている力を発揮できるような仕掛けや仕組みがあればと思います。ここで具体的にどういうものがあるかというのは言えませんが、若者の持っている力を発揮できるような仕組み仕掛けを提言出来ればと感じておりました。以上です。

(野澤議長)

ありがとうございました。それでは、門脇委員よろしいですか。

(門脇委員)

はい。伊勢委員のお話しにちょっと私も胸が熱くなりました。

私は、地区公民館で事業をしておりますが、主な年齢層は大体60代70代の方がほとんどです。若い人たちがどう事業に参加してくれるのかなというところで、20代の大学生の方とお話をする機会がありました。若い世代がどんなことに興味があって何を学びたいと思っているのかを聞いた時に、「やりたいことは自分で調べて、自分で手段を選んで、自分が行きたいところを探して行けるから、地区公民館で何かをしてほしいと思ったことは正直ないです。」ということ言われた時に、ちょっとはっとしました。公民館の課題というのが参加者の高齢化になってきていて、まして今ターゲットとしている高校生から30歳辺りまでの方と関わるということのは、ほとんどない状況になっています。

現在の公民館は、ネットに弱く自分で手段を選べない方が対象になって行かざるを得ないという状況になっていると感じております。若い人、学生が地域と関わるには、地域と学校が繋がるというのが一番取り掛かりが早い、また、地域の身近なイベントとかお祭りを一緒にやるというのがやりやすいかと思っております。

岩出山の地元高校のボランティア部がお祭りに参加して、一緒に盛り上げてもらっているという現状があります。地域の人と学生が関わることで顔を覚えてもらい、町で会った時に声掛けやすくなるというメリットがあることと、一つのことを一緒に作るということで、学生にとっても役に立てた自信や自己肯定感を高めることにも繋がるのではないかと思います。それがいずれ地元に対する愛着に繋がっていくという流れが一番私は理想的だなという風に感じています。

その20代の方ともお話した時に、「地域に入ることに関心がないわけではないけれど、どう地域に入って行ったらいいかわからない」ということ言われていました。若い人が地域に関わるには、入り口やきっかけをどう作るかというのが、大事なことだと感じたことと、学校と地域のニーズを把握して、それを繋いでくれるコーディネーター的な人材がとても重要だということが私が感じたことになります。

(野澤議長)

ありがとうございました。御経験の中から貴重なお話をいただきました。ありがとうございます。

黒沼委員よろしいですか。



(黒沼委員)

今まで皆さんの話を伺っていて、義務教育の出口となる中学校として、高校生になったら相談したり、悩みを打ち明けたりする場所が限られてしまうのかなというところです。いろいろお話を聞きながら、中学校の校長として考えてしまいました。当然、被災地でいろいろなお子さん方もいるのも、伊勢委員の話を聞きながら思い浮かびました。小学校からの6年間のバトンを受け取った後に、中学校でどんな力をどんな関わりをどんなきっかけを作ってあげることが大事なのかなというところを考えておりました。

本校の取組を振り返ってみた時に、やはり小学校もそうだと思いますが、宮城県の志教育や協働教育が培ってきたものがあり、地域との繋がりは本当に顔の見える関係があると思っています。このコロナ禍で、うちの学校にも夏から秋にかけて、何とか中学生の力を借りてお祭りをやりたいということで、地域から声がかかり、それは中学生にとっても出番を作っていただけること、それから地域の方々との顔の見える関係が出来ることだと、先生方にも働きかけました。先生方も協力して、先生方も地域の人達と顔の見える環境を作っていくことが、まさにコミュニティースクールの基盤を築くところにもなるなって思いながら進めて、いい機会を作っていただきました。

私は、学校の中で、家族以外の大人、学校以外の大人先輩、そういった人達に関わる機会を学校がコーディネートして演出していきたいと思いながらきっかけ作りをしています。

先ほど門脇委員がおっしゃられましたが、そのポイントとしては市民センターに校長として営業をかけ始めました。「学校で取り組んでいる活動を市民センター便りの一角に載せて頂けませんか。」と。そして、地域のことを学校からの発信だけではなく、センターから発信してもらうことで地域の先輩達もちょっと「学校に行ってみようかしら」あるいは「何かを後輩たちに話してみようかな」というきっかけになればと思っています。

(野澤議長)

ありがとうございます。コミュニティースクールの話にもなりましたが、黒沼委員が本当に先頭に立って推進されている方ですので、そういった御経験からのお話になると思います。

実は今、義務の中で小学校の国語6年生の国語の教科書の中に、幸福論という単元があります。それは、子供たちが町を良くするためには、どんなことをしたらいいかというのを自分たちで調べて、それを大人に対して提言をするという教材がある。つまり、義務の中でも、やはり地域とのつながりをどんどん深め、進めていくというような取組がなされている。委員の皆様から出たように、それを高校生や大学生の世代にどう繋いでいくかということが、私たちからの提言として何か示さ

れたらいいのかなというようなことを思いながら、今伺っているところでございました。

では中保委員をお願いします。

(中保委員)

私がお話できるのは、皆さんとは視点が違うのですが、社会教育推進班で行っている家庭教育支援事業。その中の将来親になる子供たちへの支援と、それから私どもの会が独自で行っている、命の尊厳を考える命の事業で関わってきた中高生、それから大学生。そういった方たちにコロナの少し前ぐらいから事前のアンケートを取っております。その子供たちの自尊感情に関する調査というわけではないのですが、子供たちの自尊感情について探る質問をアンケートで取りました。今までに大体3000人ぐらいの子供たちが答えてくれている。それは大きい数ではないのですが、少し御報告したいと思います。まず「自分に影響を与えてくれる友達がいますか」とか、「友達と一緒にいると安心出来ますか」というような問いかけと「あなたが今大切にしていることや大切にしている物があったら教えてください。」それから、「自分が成長したなと思うところありますか」という3つに関してタブレット等を使って学校を通さずに、私のところにデータが届くような形で行っています。全員が回答してくれたということでもかなり傾向は見られるかなと思いました。

まず、一番に感じたのは自尊感情が低い。大体、中学校1年から3年、そして高校に入ってから思春期でもあるし、自尊感情でも低い時期でもあるのですが。その中でも、やっぱり何が気になったかという、大切にしているものというよりはことが多くて、それが何かという、人の気持ちに立って考えたり、人のためにこう役に立ちたい。そういう気持ちを大事にしていると答えた生徒さんが私の想像よりはるかに多い。半分以上はそういったことも書いている。それは多分、家庭教育とか学校教育の中でそういう人がいいのだという意識を子供たちは言われてきている。「人の役に立ちなさい」「夢や目標を持って頑張りなさい」というところがあって、そう出来るのが素晴らしいことだと素直に感じているのだなと思いました。

それから、「成長したのはどんなことですか」ということに対して、自分のいろいろな能力自体は成長していても、そのことを答えるよりも、「人のことを考えて行動出来るようになった」とか、「周りにも色々考えて行動出来るようになった」というところに、自分の成長を感じている生徒さんが非常に多く回答がありました。

やはり今は生産性の高い人間を求められるところはあると思いますが、いろいろと目標を持って素晴らしい活動をしている方たちはもちろん素晴らしいのですが、そこからこぼれてしまう、そういった人間になれない自分はいる価値があるのだろうかということを言葉に出す生徒さんもいます。

今コロナで厳しい状況の中で大学生は、「自分には生きる価値がない」「自分は社会のためにまだ何も役に立ってない」というようなことを言う人もいます。終末医療の医師からは「じゃあ、皆さん病気や年を取って怪我とかでもう動けなくなって、誰のためにも何もできない人は世の中でいない人ですか？」と質問を投げかけられた時に、皆さん絶句している。やはりもしそうになったら自分は価値がない人間だろうかと考えて、何か本当に切なくなってくるような心の底で痛みを持っているのだなというのを非常に感じました。

だから今回もいろいろなすごい取組があるのですが、やはり年代に応じた取組みというのが必要で、小学校や中学校の時は、地域の方とたくさん関わる、たくさんの方が関わるというのが私はすごく大事だと思います。いろんな生き様とか、いろんな価値観、それに触れることで、子供たちはその考え方の引き出しをたくさん持っていくと思います。だから、より多くの人と自分が生まれた地域で出会って、そこが高校大学と地域を離れても地域の人と関わる。その段階に応じた取組を提示して、そういった地域の活動でも視点が見えやすいような形で提言するのがいいのかなと思いました。

自分らしく生きる、そしてこういった活動に自分から手を挙げられるような取組が大事だと思います。

(野澤議長)

ありがとうございます。福祉の分野でご活躍をされていらっしゃる中保委員ですので、そういった意味からも非常に興味ある視点でお話をいただけましたと思います。今、御紹介いただいたアンケートですが、非常に興味深いものがあるので、もし差し支えなければ御提供いただいて共有させていただいたらありがたいと思います。

(中保委員)

事前と事後の変化もあるので、少し整理してからお渡ししたいと思います。

(野澤議長)

恐縮でございます。よろしく申し上げます。

菅原委員申し上げます。

(菅原委員)

そうですね。まず、若者の実態というところで言うと、私が関わっているのは大学生ですが、大学教員になって17年ぐらい。17年前の学生さんと比べて最近の学生さんということだと、何かにつけて制限されているせいもあるのか、何か少し元気がない。昔の学生さんは、何か失敗しても、次に楽しいことをやってどんどん点数を稼いでいくようなタイプが多かった。最近の子は減点されるのを恐れているというか、標準のラインがあって、そこから落ちていくのをすごく恐れているように感じます。でも逆に、自分勝手なことはしないし、公共心もありますね。今は「人のために役に立ちたい」とかよくいっていますが、逆に言うと気を使いすぎているところがあって、「もったいない」と思いながら関わりを持っています。

私が所属している学科が、まちづくりとか地域づくりに関心のある学生がいるということが大きいとは思いますが、私のゼミでは、コロナ以前は、認知症カフェという高齢の地域の方たちが集まる企画とか、そのお手伝い。あとは、体を動かしたい高齢者の方たちの介護予防運動教室に参加して、自分たちが考えた体を動かす軽運動を一緒にやる。その中に講話のような学びの時間も入れたりしています。高齢の方たちは、孫の世代と話している感覚ですごく喜んでおられました。

それから、つい先週ですが、今年のゼミ生は「子供たちを対象にそういう活動をもっとやってみたい」ということを言って、児童館に働きかけをし、子供たちを対象に体を動かす遊び、体操の遊びを2カ所ぐらいでやってきたようです。それなりに手応えを感じて戻ってきたようです。

ですから、見た目は静かなのですが、やらせれば何でも出来るという学生が結構いる。何か、もっと引き出してあげたいと思うのですが、それが中々難しいというのが、私の悩みでもあります。

大学は、入ったら4年間しっかり学んでほしいと思いますが、どちらかというと、もう1、2年経つと次はもう将来のことを考えなくては行けない。大学卒業後にいったいどの会社に勤めるのかということが、大きな課題になってくる。実際それが自分に合っているのかとかということ、すごく真剣に考えなくては行けなくて、「大学に入ったからって遊んでいられない」というのが実情だと思います。

また、大学を卒業した後に就職しても転職する人は結構多くて、ずっと悩みは尽きないですね。就職出来たからそれで終わりということでは全然ないです。実際の会社勤めもそうですけど、しばらくすると親がちよっと病気になってしまったとか介護の問題が出てきたりする。そして、家庭を持って子育てに入るという人たちも出てきます。

大学卒業後の自分の生活、仕事、子育て、介護、いろいろやることがありすぎて、その中で何を学ばいいか、何を学べば自分の生活がより良くなるのかということが分からないままに、どんど

んどもん時間が過ぎているような感じが自分自身も振り返ってそう思います。

結局、困難に直面した時に誰も教えてくれなくて、自分で処理しなくてはいけないみたいなどころがあるかなと思います。ですから、学ぶべきことはたくさんあるのですが、きっかけとか繋がりとかがなかったり、会社に入ってから新しい人間関係だけになってしまったりと広がりがすごく限られているのかなと感じます。

最初の話に戻りますが、高校生から30歳というこの若者の括りですが、その世代世代で直面する課題で違うと思うので、そこに合わせて考えていく必要があると感じております。以上です。

(野澤議長)

ありがとうございます。実際に学生さんと関わっていらっしゃる中から、いろいろと感じていらっしゃることなどをお話していただきました。

委員の皆様から、それぞれが実際に感じていらっしゃることをお話をいただきましたが、いかがでしょうか。他の委員の皆様のお話を聞きながら、補足あるいは質問等がありましたら、お聞かせください。

(増田委員)

富谷には富谷高校があって、私たちも積極的に働きかけています。「語り合い」というイベントがあったので参加をお願いしたら、自ら二人の女の子が手を挙げてくれました。「素晴らしいね」と言っていて、その子たちと話をしたときに、「どうしてすぐにパッと手を挙げた」と聞くと二人とも全く何の躊躇もなく、「内申のためです」と言ったのです。それを聞いていたみんながびっくりしたのですが、ある意味あつぱれと思いました。実際、その「語り合い」が素晴らしかったですし、そこで「自分の将来の方向性を考え直した」ということがあって、「きっかけは何でもいい」と思うようになりました。

機会を与えていくということが大事だなと実感したことを思い出しました。

(野澤議長)

ありがとうございます。他はよろしいですか。

(坂口委員)

どうすればいいのかなと考えた時に、その若者がメインのプレイヤーとして活躍出来る場を作っ

てあげたいと思います。そうした時にまずやるべきは、彼らの気持ちを理解すること、そしてケア

をして支援をする。育成があって後押しなのですが、その中に本物との関わりというのが必ず必要になって来ると思います。本物というのは、そういう成功している人という意味でなくて、地域で経験を持ってきたその経験者。それはいわゆる地域にずっとおられるリーダーの方、そのような本物との関わり場を作ってあげることによって、彼らは前に一步進んでくれるのではないかと思うのです。

(野澤議長)

ありがとうございます。はい、伊勢委員。

(伊勢委員)

私は20年ぐらい前に、内閣府の国際交流の青少年育成団体の役員をしております、日本全国の若者と関わっていました。その関係で、宮城県の団体の役員もやっていて感じるのは、どこも青年層の育成には苦戦しています。青年と言いつつも青年ではなくなっている。

宮城県でいうと大きい転換期になったのは、県でやっている「少年の船」という事業が30年で終わってしまったことだと思います。あの活動が多世代の交流になっていて、東日本フェリーで富士山に行って帰って来るという5泊6日の事業でした。私も何年間かスタッフで参加させていただいたのですが、あれは、大人(県)が企画をし、大人のスタッフがいて、そこに大学生、高校生が層になってグループのリーダーになり、そして小中学生が参加者という構図でした。300人規模の事業でそこに学びの循環が生まれていて、リーダー層が輩出されて来たというのがあったと思います。今、社会で活躍している青年層を見ると、少年の船の出身者という人が非常に多かったのです。5泊6日の宿泊体験を通して子供たちも若者も互いに育って来て、自分が学んで来たこと、その次のポジションが見えてたからこそあの循環が生まれていたのだというのをすごく痛感してまいります。様々な理由からなくなりましたが、そういう事業というのは必要になってくるんだろうなというのを感じてまいります。

国際交流のお世話になった方に言われたのが、「やっぱり青年層が元気だと社会は元気なんだ」と。どんな分野でも青年層が引っ張って行くことが、うまく回るというか。今の日本社会は青年層の元気がないので、そういう意味でもすごい危機感を持っています。

若者と一緒に問いを立てながら、目標を明確に見せて、その場を作る。ただ、作るだけでは絶対足りなくて、何が必要かという、伴走できるオーガナイザーとかファシリテーターとかが必要なのです。ただ、場を作っただけではダメで、そこに至るまでに、どういうステップを踏んでどう実現し

たかというのをその都度その都度確認し、彼らの悩みや考えていることを受け止めて、少しだけアドバイスができる人。そこにも、もちろん本物に触れることが大事で、少し上の大人の経験とかが参考になっていくので、やっぱりそういう場を作っていくことは必要なんだろうなというのを感じています。

宿泊を兼ねたような体験活動というのは、彼らにとってはものすごく重要ですし、そういったところに伴走出来るような大人の育成をする仕組みが必要だなと思っています。それがその地域レベルでどこまで出来るのかということもあるとは思いますが、今言ったように、やっぱり彼らはやりたいことがあるので、そこにこっちがやらせたいことではなくて、彼らがやりたいことに私たち大人が伴走できる。それは人だけではなくて、やっぱりお金というような支援と人材で繋ぐっていうところとセットかなと思っています。人・物・金のセットで伴走出来ればいいのかと思っています。以上です。

(野澤議長)

ありがとうございます。今、委員の皆様から様々な御意見をいただきました。大変ありがとうございました。皆様のお話を聞きながら、実はある方のことを思い出していました。最初に坂口委員からありましたけれども、若者たちにインセンティブを与えることが必要というお話とか、それから、先ほど菅原委員からもありましたが学生たちが卒業した後、社会に出た時の生き方、生き様、それを支えるものという話もありました。

実は、宮城県の中小企業家同友会の会長をなさっていた鍋島様という方がいらっしゃるのですが、その方とお話をした時に、社員の方々には例えば「PTA の役員とか何か声がかかったら、絶対断るな」と。仕事忙しいはずなのに、「ぜひやるべきなんだ」というお話をされるんですね。なぜか。「そういう地域の中で活動している中で、いろんな人との出会いがあって、それで社員自らが成長するんだ」というお話なんですね。それから、「真剣に子供のため社会のためにやっている人というのは、会社にとっても実は非常に有為な人材である」というお話があったのです。

実は生涯学習とか社会教育というと、どうしても企業との繋がりというのは、これまで中々意識されてこなかったような気がするんですね。実は私の自問でもあるのですが、やはり社会総掛かり社会全体でやっていくためには、そういった方々との繋がりをしっかりと作っていくこと。生涯学習というのは、そこまできちっとして役割を持つんだということを意識をして取り組んでいけたらいいのかなと。皆様のお話を聞きながら、さらに意欲を強くしたところがありました。ぜひ今日いただいた意見などを整理させていただきながら、今後に繋げたいということでもありますので、よろしくお

願いをしたいと思います。

それでは、次になりますけれども、事務局の方で今回の提言で目指すべき若者の姿。そういったものをもう一度皆さんと確認をさせていただきたいと思います。事務局で素案を持っていると思いますから、それをまず紹介していただいて、御意見を伺っていききたいと思います。事務局から説明をお願いします。

(事務局:加藤)

では、私から今回の提言で最終的に目指したい若者の姿を提案させていただきます。

大きく2つです。まず、若者が多様な人々との交流や、学び合いというのを通して、地域を愛する気持ちを持ってほしいということ。そして、さらに他者と協働しながら目的・目標を一つにししながら、地域づくりに関わろうとする姿、そういう姿を目指したらどうかと事務局では考えました。

御意見いただければと思います。

(野澤議長)

はい、ありがとうございます。今、事務局からも素案をお示しさせていただきましたが、委員の皆様から様々な御意見をいただきたいと思います。今日のお話ですと、もっと本音で突っ込んだ話というのがたくさんあったので、言葉を選ばずにどんどん御意見をいただけたと思います。

(伊勢委員)

本当に素敵な言葉だなとは思っています。一つ付け足したいなと思うのが、「自分を大切にすること」ですね。中保委員からもありましたが、若者と関わっていて自尊感情的なところは低いというのも分かりますし、いろんな人と関わって経験値を積んでいくと楽しいと感じてくると思います。

私も関わっている若者には、とにかく「自分を大切にね」ということは常に言っています。「何よりも、まず自分を大切にね」と。「自分を大切にし、地域を愛する」「自分の地域も大切に」とか、そういうものも入れてほしいと思います。

(野澤議長)

ありがとうございます。

他に委員のみなさま。はい、坂口委員。



(坂口委員)

いいと思うのですが、結果的に最後にはお前たち頑張れよと聞こえるんですね。支えがあってこそ、これが出来るんだということで、何かサポートが見えてこないの、それが見えるような文言が入るといいかなという気がします。

(野澤議長)

ありがとうございます。先ほどから御意見がありましたけれども、やはり本当に真剣に生きている大人の姿ですね。そういったものがあって初めて若者たちが信頼出来る。伊勢委員からもありましたが、信頼出来る大人がいてこそ、若者たちがやろうという気持ちになるというのが間違いないと思います。

はい、門脇委員。

(門脇委員)

私が思ったのは、大人の方が若者に対して指導をするという立場ではなく、若者が持つ社会に与える影響力というのを大事にしながら、対等である立場の関係性がすごく大事になるのではないかと感じています。地域づくりとか親交会(町内会)でもそうですが、何で若い人が入らないかという、上の人に意見を言っても聞いてもらえなかったり、否定されたりということが要因の一つになっているのかなと感じています。対等な関係性というのが、イメージ的に伝わるようなものがあるといいかと思えます。

(野澤議長)

ありがとうございます。今お話を伺って思い出すことがあったのですが、私は地元でコミュニティー学校を推進しているのですが、そこで委員の方と中学生の話合いをしました。その時に出された中学生の言葉が心に刺さりました。「大人の人たちは、僕たちのために何かをしてくれたり、いろんなことを考えてくれ、とてもありがたいんですけど、大人の人たちは自分たちのことをどう考えてるんですか」と言われたんですね。その時に気付いたのが「どうも大人目線というのは、子供が育っている対象、支える対象であって、自らが自立していろいろなことを考えているんだということに気付いていない大人が多いのではないか。」そのところをもう一度しっかりと確認をしていかなないと、何か押しつけになる。何か若者が望んでいないように、ただ大人が周りで考えているだけになってしまったのでは伝わらないだろうということについて感じたところでした。

他に委員の方向か。中保委員どうぞ。

(中保委員)

地域を愛する気持ちと同等の形で、若者自体がどんな地域に住みたいか、自分がもし地域を作るとしたら、どんな地域にしたいかという自分が考えるという場面は、やっぱり必要かなと思います。今言われたように、大人が上から目線で子供を指導するのではなくて、子供に教えてもらうというか子供が考える住みたい地域とはなんだろうと考えると、すごくワクワクします。もしそういった「若者が住みたい地域」というようなニュアンスのことが入るといいのかなと思います。

(野澤議長)

ありがとうございます。他に委員のみなさまどうですか。はい、増田委員どうぞ。

(増田委員)

伊勢委員がおっしゃった「自分を大切にすること」が、根本かなと感じました。そこからでないと始まらないと思います。中保委員がおっしゃったアンケートはすごくよく分かる。最近の子供たちを見てると、自分が好きとか嫌いとか、やりたいとかやりたくないとかじゃなくて、みんながどう思うかと、周りの判断に委ねてしまうために、どんどん自分のコアがなくなっていく。コアがなくなっていくから、どんどん関わるのは怖くなっていくし、自分の将来に何の希望も持てない。ある人が言っていたのは、「宇宙にぷかぷか自分は浮いているような気がする」と。それは多分、本当に自分の核をどんどんなくしていった結果だと思います。でも、周りの人には優しいし絶対意地悪はしない。でも、それが本当の思いやりかどうか分からない。そのうち自分の存在が消えてしまうのではないか。そうしてまで人を思いやるのが本当に思いやりなのだろうかと感じるので、この「自分を大切にすること」を、まず、私たち大人がしっかり見極めて、この言葉を使わなくてはいけない。そこをまず基本にその先じゃないと地域だとか人とかっていうところには至らないってことをすごく強く感じます。

(野澤議長)

ありがとうございます。他に委員の皆さんいかがですか。

はい、中保委員どうぞ。

(中保委員)

言われたお話も含めて、今インターネットの発達した社会でもありますし、全ての若者を底上げするという意味では、インターネットを使うことを提言にいれるかどうかを含めて検討してもいいのではないかと思います。自分の殻に閉じこもっている若者にとっては、こういった行事に参加するのは結構ハードルが高いと思うのでインターネットを活用した事業というのも必要かと考えます。

今の若者の多くはゲームに興味を持っているので、ゲームの一環として自分が作る地域どんな地域がいいだろうと、ネット上に仮想空間を作っていく。イベントに参加出来ないような若者でも、自宅からそこに参加してバーチャル的に参加をして、こういうイベントがあったらいいなとか、こういう施設があったらいいな、自分の居場所はこういうところがあるといいなというのは、いろいろな形で情報として入ってくる。私たちも、きっとその情報に大人も教えてもらえると思います。

ですから、実際の取り組みというのはすごく大事ですが、情報収集や発信、それから受信、こちらからメッセージを伝えられるという面では、ゲームのバーチャル的な世界も取り入れてもいいのではないかと。行政でこういうことが作れるかどうかは分かりませんが、心を表せない人たちが表してくれる場としても、活用出来るのではないかなと思ったところでした。

(野澤議長)

ありがとうございます。やはり世代が変われば関心があるものも違ってくるでしょうし、私なんか中々ゲームの世界が分からないですが、多分どれだけ若者たちを引きつけているかってことは間違いないとすれば、そういったことなどもあるのかもしれない。

はい、伊勢委員。

(伊勢委員)

中保委員が今おっしゃったことは、もう宮城県でも動いていて、県ではないのですが、この前企業さんが閑上公民館と富谷の方で子供たちを対象に「マイクラフト」というものをやっていました。また、e スポーツという切り口で、若者支援等をしている団体 NPO の方が、ひきこもりの若者とかを対象にしてやっているっていう事例はあります。

(野澤議長)

社会が大きく動いているというのは、間違いなくあるということですよ。ありがとうございます。

はい、他に委員の皆さんいかがですか。

(石井委員)

この事務局案というのは本当にすごく良い案ではあるとは思いますが、皆さんから意見がありましたような「自分を大切にするとか、「支え」とか「サポート」という言葉が入る。これは本当に必要なことだと感じています。

あと、インターネットの関係、若者がそれぞれ自分の得意、不得意な分野を持っていて、自分の得意な分野に参加してもら。「私は絵が書くのが得意です」とか「私はスポーツが出来ます」とか、そういったことに参加してもらう仕掛けとか仕組みが構築出来ればいいのかと感じていました。

(野澤議長)

ありがとうございます。黒沼委員よろしいですか。

(黒沼委員)

はい。皆さんの御意見を伺っていて、そのとおりだなと思いました。私たちの学校では、地域の人たちと関わる時に「出番・役割・承認」という3つのキーワードを頭の中に描きながらコーディネートします。出番を作り、いい役割を与え、そして子供たちの活動を学校も認めるし、地域の人たちにも認めてもらう。「出番・役割・承認」このキーワード、これを文言の中に入れるかどうかは別としても、そのサイクルは大事かなと思っております。

そして若者のネット上の繋がりというところがあったと思うのですが、何かを一つ動き出したら、そのことを定点として若者を主体としたネットワークが築けていけばいいのかなと思いました。

(野澤議長)

ありがとうございます。菅原委員いかがですか。

(菅原委員)

なかなかいい案が思い浮かばないのですが、2つ目の「他者と協働しながら」という表現があるのですが、この「他者」というのは何を指しているのかなということを考えていました。「若者」という括りも、宮城県に生まれずっと住み続けている人もいれば、いったん外に出て戻ってくる人もいるし、移住者もいると思います。宮城県に新しく住み始めてくださる方もいらっしゃる中で、ネットワーク

のあり方もいろいろあるなと思います。ですから、この「他者」という表現に変わる何かないかなと考えていますが、まだ思い浮かばないというところです。ですから、「他者と協働」というところをもう少し詰めて考えた方がいいかなとは思いました。

(野澤議長)

ありがとうございます。金委員いかがですか。

(金委員)

先程、伊勢委員がおっしゃった「自分を大切に」というところはすごく大事なところだなと思っております。「自分を大切に」というところで、自分の良さはやっぱり分かりたい。そして自分の良さに気付くためには、先程黒沼委員さんがおっしゃった「出番・役割・承認」というところが大事なところだろうなと感じております。自分が好きじゃないと自分の地域も好きになれない。自分の良さが分からないと地域の良さも分からないというところがあるかなと思います。

もう一つですが、若者たちから地域づくりに関するたくさんの情報を集めても、ちゃんと「あなた達の考えがこのように反映されたよ」という部分が見えないと、それこそ信頼というベースは難しい。「提案された意見がこのように通っていくよ」というものが見えたらいいなという思いを持ちながらこの若者の姿について考えておりました。以上です。

(野澤議長)

ありがとうございます。冒頭、事務局の方から様々な県として展開をされている事業のご紹介がありましたけれども、今、公民館などでもそうですが、住民の参画事業というのがやはり非常に重要視されていて、実はその成果が非常に大きいということをおっしゃっておりますよね。

だとすれば、やはり今我々がテーマにしている若者たちの声を、もっともっとう事業の中に組み入れる工夫、若者たちが自分たちで考えて、伴走する大人たちの助言を受けながら、自分たちで考えたことが実現出来るとすれば、今、金委員がおっしゃられたように、最後にはそれが認められ、関わる若者たちもやりがいを持って出来るようになるのではないかと思います。やはり先程来ありますけれども、大人主導ではなくて、関わる若者たち中心の取組というものを実現していけたらいいかなというようなことを、皆さんの御意見を伺いながら感じたところでございます。

たくさんの御意見をいただいて参りました。ありがとうございます。時間が迫ってまいりました。今日いただいた意見を事務局と整理をさせていただきまして、前に御案内をさしあげました小委員

会のメンバーを仙台近辺から7人の方々を選ばせていただきましたが、その皆様にテーマを決めてまいりたいと考えてございます。その話合いの結果につきましては、皆様にはもちろん共有をさせていただくということで進めさせていきたいと思っております。本日の審議はここで終わらせていただきたいと思っております。御協力どうもありがとうございました。事務局お返しいたします。

(事務局)

野沢議長、大変ありがとうございました。そして、委員の皆様も様々な意見大変ありがとうございました。それでは、連絡・報告の方に移りたいと思っております。何か委員の皆様の方で報告連絡はございますか。

(増田委員)

皆さんの机の上にみんなの学校っていう映画上映会のチラシを置かせていただきました。大阪にある学校のドキュメンタリー映画になっています。その当時の校長先生に、この日来ていただけることになっております。映画を見た後に語り合いの時間を設け、教職を目指している学生さんとか、富谷にある学校の先生などに登壇いただき、当時の校長先生と一緒に語り合いをする時間も設ける予定でございます。なかなか御本人のお話を聞くという機会はないと思うので、御都合がつかれましたら、ぜひいらしていただきたいなと思ってチラシを置かせていただきました。そよろしく願いいたします。

(事務局)

ありがとうございます。他にございませんでしょうか。

それでは次回の会議については、資料3の方に予定の方を書かせていただいておりますが、小委員会を12月22日に開催予定です。メンバーは、伊勢委員、遠藤委員、坂口委員、菅原委員、野澤議長、増田副議長、松田委員の7名の委員の方をお願いしております。その後、第4回目を1月末から2月2日あたりのところで日程調整させていただきたいと思っております。いつものようにメールで調整させていただきますので、御協力をよろしく願いしたいと思っております。

それでは以上をもちまして、第37次第3回宮城県社会教育委員の会議兼第12次第8回宮城県生涯学習審議会を終了いたします。

本日も大変ありがとうございました。帰りは気を付けてお帰りいただければと思います。